

2025 年度 卒業生調査報告書

調査概要

- ・調査実施期間：2025 年 8 月 1 日～9 月 30 日
- ・調査対象者：2008 年／2012 年／2015 年／2018 年／2022 年に本学の学部もしくは研究科を卒業／修了した人のうち、如水会に連絡先が登録されている人。
- ・調査方法：メールおよびはがきにて Web 回答フォーム（Google フォーム）に誘導し、任意回答のアンケートを実施した。
- ・回答者数（回収率）：下記の通り。
 - 全体：1271 名（32.5%）
 - 2008 年卒：259 名（33.6%）
 - 2012 年卒：254 名（31.6%）
 - 2015 年卒：279 名（34.4%）
 - 2018 年卒：284 名（34.8%）
 - 2022 年卒：195 名（27.3%）

要約

学部卒業生について、在学中の取り組みでは、専門科目からゼミや卒業論文までの専門教育と課外活動に熱心であった。そして在学中の取り組みと身についた能力には統計的な関連が確認でき、とりわけ専門科目・ゼミ・卒業論文への取り組みと、専門分野の思考力や論理的思考力、データ分析・活用能力といった専門性や研究能力は比較的強く相関している。全学共通科目への取り組みと上記能力との相関も一定程度みられる一方、外国語科目と上記能力の相関は比較的低いことから、国際教育と専門教育との接続に関してもさらなる発展が望まれる。

大学院修了生について、在学中の取り組みでは、授業やゼミ・学位論文などに加えて、教員から指導を受けることや同じ大学院生と研究の意見交換をするなど、教員や大学院生との交流に熱心であることが特徴的である。さらに在学中の取り組みと身についた能力の関連を確認すると、学位論文および教員からの研究指導が、最先端の研究を理解する能力と比較的強く相関している。それに次いで、ゼミや先輩・同期・後輩との研究相談も、これらの能力と一定の相関を示した。また、授業や授業以外の自主的な学習、教員からの研究指導が社会変化に応じて柔軟に学ぶ能力と比較的強く相関することは、大学院での経験が学び続ける力の習得にもつながることを示唆する。

回答者の中で留学を経験したのは 2 割強であるが、未経験者の約 4 割が留学を検討しながら実現には至らなかった。そして身についた能力の平均値を比較すると、留学の有無で国際感覚やグローバルな視野などにおいて大きな差が見られた。キャリアに関する考えでは、7 割以上が今の仕事に満足していた一方、同じ会社で上位職を目指しているのは 5 割程度で、2 割ほどが転職を検討している。4 割程度の人は実際に転職を経験している。

生涯学習に関しては、卒業した学部の専門分野と生涯学習のニーズの間に関連が示唆された。また一橋大学が強化すべき事柄は研究分野の選択と集中、世界の大学との連携が挙げられ、本学の強みとして高い教育水準を選択した人が7割にのぼった。最後に、一橋大学に期待する情報発信としては、学内外で受講可能な公開講座が6割ほど選ばれ、生涯学習や知識を更新する場として本学への期待が大きいことも読み取れる。

1. 基本属性（図表編 p. 1～p. 2）

学部卒業生の属性の分布を図1-1、大学院修了生の属性の分布を図1-2に示した。学部・大学院ともに、各学部・研究科から満遍なく回答が得られている。また、性別や入試形態（学部卒業生のみ）についても母集団に近い分布となっている。また、図1-1の卒業年から見て取れるように、調査対象となった各卒業年から偏りなく回答が得られている。なお、図1-2では、大学院修了生の修了年にやや偏りが見られることがあるが、これは、如水会名簿に卒業生／修了生として登録された後に、本学内で進学した対象者が存在することによる。

2. 学部卒者の在学中の取り組みと成果（図表編 p. 3～p. 13）

図2-1は、学部卒業生の在学中の取り組みについて可視化したものであり、「0=取り組まなかった」「1=不熱心」から「5=熱心」までの6段階尺度による回答となる。図の中央から右側に、「やや熱心」と「熱心」からなる肯定的回答の割合を、左側には、「どちらとも言えない」から「不熱心」「取り組まなかった」の割合を配置している。図の右側に注目すると、「専門科目」「ゼミ」「卒業論文」「課外活動」は肯定的な回答者が5割を超えており、専門教育などへの熱心な取り組みが確認できる。それに次ぐのは「全学共通教育科目」「外国語科目」「アルバイト」などであるが、肯定的な回答者は5割より少なかった。また「GLP」「ボランティア」「留学」「起業」「研究成果の発表」は、「取り組まなかった」と回答した割合が多かった。

そして、学部卒業生の在学中の取り組みを学部別に集計したものが図2-2である。「全学共通教育科目」「外国語科目」は法学部と社会学部において肯定的回答が多く、「専門科目」は商学部と社会学部、「ゼミ」「卒業論文」は社会学部で最も肯定的回答が多かった。また「資格の取得」と「授業以外の自主的な学習」は法学部卒業者が最も熱心に取り組んでいた。

図2-3は、学部卒業生が在学中に身についた能力を可視化したものであり、「1=全く身につかなかった」から「5=非常によく身についた」までの5段階尺度による回答となる。これまでと同様、図の中央から右側に、「身についた」と「非常によく身についた」からなる肯定的回答を、左側にそれ以外の回答を配置している（以下同様）。図の右側の肯定的回答に注目すると、全20項目の能力の中で、肯定的回答者が5割を超えているのは14項目である。そして、最も肯定的回答が多いのは「多様な問題への幅広い関心」であり、反対に最も少ないので「自らの研究成果を効果的に発信できる能力」となった。

そして、学部卒業生が在学中に身についた能力を学部別に集計したものが図2-4となる。商学部と社会学部の間に特に顕著な差異が見られる。商学部は「専攻分野に関する専門的素

養や思考力」「目的達成に必要なデータや情報を適切に収集する能力」「専門的知識に基づいて調査・分析を行う能力」「明確な目標を立て、計画的に実行する能力」など、専門性や研究遂行に関する能力で肯定的回答が多かった。一方、社会学部は「幅広い知識と教養」「多様な問題への幅広い関心」「社会の中の諸課題を発見する能力」「社会の変化に応じて柔軟に学び続ける力」など、視野の広さを示す能力に関して肯定的回答が多かった。また、「リーダーシップ」「論理的思考力とデータ分析・活用能力」は商学部と経済学部、「優れた国際感覚やグローバルな視野」は法学部と社会学部において肯定的回答が多かった。

表2-1では、在学中の取り組み（正課学習に関するもののみ抜粋）と、在学中の身についた能力との順位相関係数を学部別に算出した結果をまとめた。全学部に共通の傾向として、専門科目・ゼミ・卒業論文が、「専攻分野に関する専門的素養や思考力」「論理的思考力とデータ分析・活用能力」「最先端の学術論文や研究発表を理解する能力」といった、専門性や研究遂行に関連する能力と比較的強く相関している点が挙げられ、学部教育の効果があらわれていると考えられる。また、全学共通科目も「専攻分野に関する専門的素養や思考力」と一定の相関がみられることから、全学共通科目が専門教育の導入としての機能を果たしていることが読み取れる。

一方、現在の生活に必要とする能力を可視化した図2-5によると、上記の専門性や研究遂行に関連する能力が、現在の生活に「とても必要」「必要」と回答している回答者の割合は、他の能力と比較して低いことがわかる。これは、正課教育の成果と、卒業生のキャリアや生活で活用される能力との間に、一定のギャップがあることを示唆するものである。逆に、「他者を思いやる姿勢」、「効果的なコミュニケーション能力」など、正課教育の取り組みとの相関は高くない（表2-1）。一方で、現在の生活に「とても必要」「必要」と答えた回答者の割合が高い（図2-5）能力もある。これらの非認知能力と正課教育との接続については、創意工夫の余地があると言える。

上記以外の課題として、外国語科目への取り組みと各能力との相関が、全学共通科目と比較して低い傾向にあることが挙げられる。こうした点から、国際教育と専門教育との接続に関するさらなる発展が望まれる。

つづいて在学中の成績を確認したい。図2-6は在学中の成績を可視化したものである。「ほぼ全科目悪かった」は14.6%、「悪かった科目が多かった」は37.3%、「良い科目と悪い科目が半々ぐらいだった」は31.9%、「良かった科目が多かった」は12.8%、「ほぼ全科目良かった」は3.4%であった。

そして図2-7は、「ほぼ全科目悪かった」「悪かった科目が多かった」を成績下位、「良い科目と悪い科目が半々ぐらいだった」を成績中位、「良かった科目が多かった」「ほぼ全科目良かった」を成績上位として、成績別に在学中の取り組みについて可視化したものである。「全学共通教育科目」「外国語科目」「専門科目」「ゼミ」「卒業論文」「授業以外の自主的な学習」などの項目において、成績上位者は在学中の取り組みに関して熱心に取り組んだとする回答が多かった。加えて、図2-8は、成績別に在学中に身についた能力を可視化したものである。全体的に、成績上位者ほど身についた能力に関する肯定的回答が多く、本学の成績

評価の妥当性を示唆する結果となった。

3. 大学院卒者の在学中の取り組みと成果（図表編 p. 14～p. 16）

図3-1は大学院修了生の在学中の取り組みについて可視化したものである（回答の尺度および図の構造は、本文p.2の図2-1に関する説明を参照。以下同様）。「やや熱心」と「熱心」を合わせた肯定的回答に注目すると、最も肯定的回答が多かったのは「授業」の91.9%であり、学部卒業生の授業に関する項目（「全学共通科目」「外国語科目」「専門科目」）と比較して顕著に高い。そのほか、「ゼミ」「学位論文」「授業以外の自主的な学習」「読書」「教員から研究に関する指導を受けること」「大学院の先輩／同期／後輩と、研究に関する相談や意見交換をすること」で肯定的回答が多かった。

図3-2は、大学院修了生が在学中に身についた能力を可視化したものである。「身についた」と「非常によく身についた」を合わせた肯定的回答に注目すると、学部卒業生と比較して、全体的に肯定的回答の割合が高いことがわかる。最も肯定的回答が多かったのは「専攻分野に関する専門的素養や思考力」の95.3%であり、肯定的回答が8割を超えたのは「幅広い知識と教養」「多様な問題への幅広い関心」「社会の中の諸課題を発見する能力」「論理的思考力とデータ分析・活用能力」「専門的知識に基づいて調査・分析を行う能力」「社会の変化に応じて柔軟に学び続ける力」であった。最も肯定的回答が少なかったのは「リーダーシップ」となった。

表3-1は、在学中の取り組みと、在学中に身についた能力との間の順位相関係数をまとめたものである。学位論文および教員からの研究指導が、「最先端の学術論文や研究発表を理解する能力」等の研究能力と比較的強く相関している。それに次いで、ゼミや大学院生同士の研究相談も、これらの能力と一定の相関を示している。ここからは、本学の少人数の指導体制が、大学院生の研究能力の向上に寄与していることが読み取れる。

一方、大学院修了生には、研究職以外の高度専門職業人養成を目標としたプログラムに在籍した人も多い。そこで、図3-3において、特に多くの人が現在の生活に必要と肯定的に回答した「幅広い知識と教養」「効果的なコミュニケーション能力」「主体性」などに着目すると、これらの能力と相関している取り組みとしてまず挙げられるのは、授業、自主的な学習、読書である（表3-1）。授業やその予習復習、発展的学習などを通じて、修了生が必要な能力を身につけていったことがうかがえる。さらに、大学院生同士の研究相談・就職相談などもこれらの能力と相関しており、大学院が多様な人との関わりを通じた人間形成の場としても機能していることが示唆される。加えて、教員との研究相談も、これらの能力と関連がみられることから、研究志向の有無にかかわらず、教員が大学院生の能力向上に関して重要な役割を担っていることが改めて確認された。

最後に、授業、授業以外の自主的な学習、教員からの研究指導などが、「社会の変化に応じて柔軟に学び続ける力」と比較的強く相関している（表3-1）ことにも注目したい。これは、大学院での経験が学び方の習得にもつながっていることを示唆するものである。これらの能力は、現在の生活に必要だと回答する回答者も多いことから（図3-3）、生涯学習が求

められる時代における大学院教育の可能性を示す結果だと言えよう。

4. 在学中の経験（図表編 p. 17～p. 18）

回答者のうち、留学を経験していたのは2割強であった（図4-1）。表4-1は、在学中に身についた能力の平均値を、留学経験者と未経験者との間で比較したものである。「優れた国際感覚やグローバルな視野」で特に大きな差が見られ、留学のインパクトの大きさが見て取れる。ただし、この顕著な差は、留学未経験者の平均値が、他の能力と比較して低いことも由来する。

また、留学未経験者の留学検討度合いの分布を示す図4-2からは、留学未経験者の約4割が、留学を検討したものの実現に至らなかつたことが読み取れる。留学を希望するすべての人がそれを実現できるわけではないことを勘案すると、留学未経験者も国際性を伸ばす機会が得られるような仕組みを学内に整備していくことも、本学の今後の課題として挙げられるかもしれない。

インターンシップに関しては、約4割の回答者が経験していた（図4-3）。インターンシップ経験者と未経験者との間で、身についた能力の平均値を比較した表4-2によると、「専攻分野に関する専門的素養や思考力」「論理的思考力とデータ分析・活用能力」「専門的知識に基づいて調査・分析を行う能力」において、比較的大きな差が確認された。本学で得た専門的知識や研究方法論を実践的に活用する機会を、インターンシップで得られた回答者が多かったのかもしれない。ただし、インターンシップ経験と身についた能力との関連は、過去2回の卒業生調査では見られなかつたため、今後は卒業年別の分析などを通じて、効果の実態を詳細に検討する必要がある。

図4-4は、本学での授業・ゼミの経験について、回答者に事後評価してもらった結果である。「授業やゼミは楽しかった」に対しては、約75%の回答者が肯定的に評価していることから、本学の正課教育への満足度の高さが確認できた。一方、「学修に関する教員や大学からのサポートに満足している」は肯定的な回答が6割を下回っていることから、個別の学修支援に関しては、今後のさらなる充実が期待される。

図4-5, 4-6では、新型コロナウイルス感染症の流行の影響を受けた2022年卒者に絞って、オンライン授業の経験を尋ねた結果をまとめた。主観的な事後評価ではあるが、2割以上の履修科目がオンラインで開講されたと答えた回答者が4分の3を占めている（図4-5）。一方、図4-6からは、「オンライン授業は楽しかった」「オンライン授業に関する教員や大学からのサポートに満足している」について、否定的な回答が肯定的な回答を上回っていることが見て取れる。これは、図4-4の授業・ゼミの経験の事後評価と比較して、顕著に低い値である。ポストコロナのオンライン授業の実施にあたっては、学生の関与を深める創意工夫や、支援体制の強化に関する努力の継続が求められる。

5. 卒業・修了後のキャリアと学び（図表編 p. 19～p. 21）

図5-1～表5-1では、回答者の初職と現職の状況をまとめた。初職・現職ともに正規雇用

率が高い。また、初職・現職とともに、主な職種は事務・企画職や営業職であり、そこにコンサルタント・IT専門職やその他の専門職が続いている（図5-2、5-4）。なお、図5-4では、現職で管理的職業に就いている人も1割前後みられ、卒後20年に満たない本調査の回答者の中にも、すでにマネジメント職としてのスキルが求められる立場にある人が一定数いることがわかった。表5-1は、現職の勤務先の業種について、上位3職種をまとめたものである。学部卒業生に関しては、出身学部にかかわらず、コンサルタントや人材派遣等のサービス業（「サービス業・その他の業種」）に勤めている人が最も多かった。ただし、大学院修了生に関しては、現職の業種の2位が「教育関係（大学含む）」になっていることから、一定数が大学に勤務していることが推察される。それに伴い、職種や雇用形態なども、大学院修了生には特有の傾向がみられる。

図5-5は、キャリアに関する考え方を可視化したものである。「当てはまる」と「非常によく当てはまる」を合わせた肯定的回答に注目すると、「今の仕事に満足している」のは7割を超えており、「現在の会社で上位職を目指している」は5割、「転職を検討している」のは2割程度となった。図5-6で実際の転職回数を確認してみると、4割程度の回答者が1回以上の転職を経験しており、転職を通じたキャリアアップの一般化が示唆される。なお、図5-7では、卒業・修了後の国際経験について、経験があると答えた人の割合をまとめているが、経験者の割合はいずれも半数未満であり、国際的なキャリアを歩んでいる人は少数派であることが明らかになった。

図5-8は、生涯学習に対する考え方を可視化したものである。学びたい、または学んだ経験がある教育機関として「大学院」を選択した人は6割を超えており、本学の卒業／修了生にとっては、大学院は他の教育機関と比較して身近な生涯学習機関であることがわかる。また、学びたい、または学んだ経験がある学習の内容として、最も回答が多かったのは「経営・ビジネスに関すること」であり、それに続くのが「デジタル技術・情報通信技術に関すること」「経済に関すること」となった。

そして、生涯学習で学びたい内容を学部別に可視化したのが図5-9である。「学び（通い）たいと思う」と「実際に学んで（通って）いる／学んだ（通った）経験がある」を合わせた肯定的回答に注目すると、「経営・ビジネスに関すること」「経済に関すること」「デジタル技術・情報通信技術に関すること」は商学部と経済学部、「社会問題・福祉・教育に関するここと」「歴史・心理・文化・哲学に関するここと」は法学部と社会学部、「法律・政治・国際関係に関するここと」は法学部の肯定的回答が多く、卒業した学部と生涯学習のニーズとの間の関連が示唆された。

6. 一橋大学への要望・意見（図表編 p. 22）

図6-1～図6-4に、一橋大学への要望や意見に関する回答状況をまとめた。強化・新設してほしい学生支援としては、キャリア支援が最も多く、学習活動の支援や経済的支援に関する項目の選択率も高かった（図6-1）。一橋大学が最も強化すべき事柄としては、「強みのある研究分野への選択と集中」「世界の大学との連携」が2割を超えており、その他の選択

肢も一定程度選ばれており、本学に対する卒業生・修了生の多様な期待が見て取れる（図6-2）。また、一橋大学の強みとしては、「高い教育水準」の選択率が7割にのぼった（図6-3）。これは、回答者の本学での学習経験の満足度の高さを示唆するものとも言え、それは、授業やゼミが「楽しかった」と答えた回答者が7割を超える（図4-4）ことからも支持されるだろう。最後に、一橋大学に期待する情報発信としては、「学内外で受講可能な公開講座」を6割程度の人が選択していた（図6-4）。回答者の生涯学習への積極性が総じて高いことからみても（図5-8）、知識を更新する場としての本学への期待も大きいことが読み取れる。

7. まとめ

以上の結果から得られる本学の教育の成果としては、卒業生・修了生の専門的な素養や研究能力等の向上に貢献していること、卒業生・修了生は正課教育に積極的に取り組み、卒業／修了後もその経験を肯定的に評価していることなどが挙げられる。他方、さらなる取り組みが求められる課題としては、本学の教育を通じて身についた能力とその後のキャリアで必要とされる能力との間のギャップを埋めていくことや、オンライン授業の質の保証、外国語教育等の活用による学内の国際化のさらなる発展などがある。これらの点を中心に、卒業・修了年別の分析などを通じて、今後さらに議論を深めていく予定である。